

Muraguchi Kiyo Women's Clinic

妊娠適齢期に子どもを産めない？～自己責任だけなのか～ 患者情報管理 柴田泰子

「院長が代表を務める市民団体リプロネットみやぎでは、リプロ『性の健康』を守る」基礎講座を開催しています。その中の一講座「現代女性のライフスタイルと妊娠適齢期とのズレ～私の妊活も振り返って～」を私が担当することになりました。データを調べ、考え、36歳で子どもを産んだ自分のことも振り返りましたが、その作業を通して個人的なことの背景にある社会的・政治的な問題が見えてきました。私は20代の前半まで投票にも行きませんでしたし、「政治や社会のことは分からないから、その分野の人に任せて、自分は目の前のことをそれなりにしていけばいい」と思っていました。でも「その無関心さは、結果的に、自分や大切な人達に厳しい現実として跳ね返ってくる」と気づき、今は政治に関心があります。格差と貧困、高すぎる教育費、非正規雇用の低賃金と正社員の過重労働、自死、過労死、、それらの問題に心が痛み、何とか社会が変わって欲しいと切に願っています。

個人的なことを話すと、私には姉と弟がいて、とても貧しい家庭で育ちました。父親が酷いギャンブル依存症で母親が一人で3人の子どもを育てていたからです。また、2年半前に弟を自死で亡くしています。彼の死は「年間自死3万件」という膨大な数のうちの一つに過ぎないのかもしれませんが、私たち家族には言葉では言い表せない自責の念と苦しみのものでした。

一見豊かに見える日本ですが、確実に格差と貧困は広がり、日々の暮らしもままならない人々が多く存在します。クリニックの患者さんを通して厳しい現実がたくさん見えてきます。今回「妊娠適齢期」の問題を考えた時、そこにたどり着く前の、「恋をすること」や「家庭を持つこと」までにも格差があることを突き付けられたような気がしたのです。

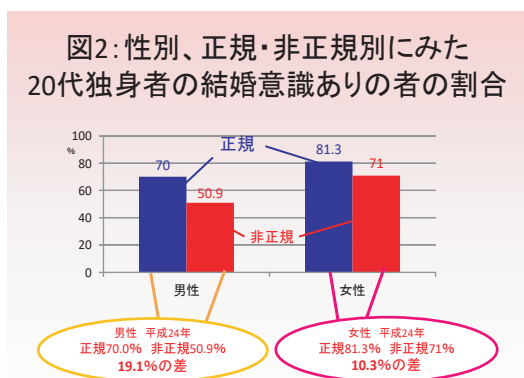
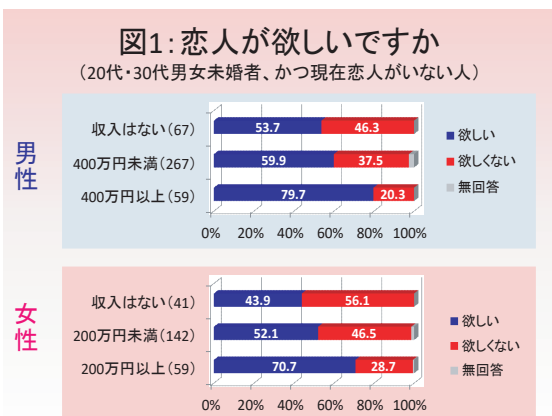


図1: 年収が低い者ほど「恋人が欲しい」割合が高い。
(平成26年度「結婚・家族形成に関する意識調査」報告書より作成)

図2: 非正規雇用は「結婚したい」割合が正規雇用より約20%(男性)低い。(少子化社会対策白書 平成27年版より作成)

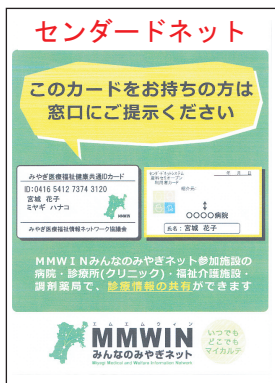
全て「お金」だと言っている訳ではありませんが、非正規雇用には低賃金と保障の低さが付きまとい、それが恋愛や結婚への足枷となっていることが分かります。一方、正社員の過重労働は、日々の生活から精神的・時間的余裕を奪い取り、どちらも大変な状況です。また世界的に見ても異常に高い教育費によって、大学進学率は家庭の経済状況に大きく左右され、「風俗で学費を稼ぐ」ということも実際に起きています。子どもたち・若者の学ぶ権利が保障されている社会とは言い難い状況です。「妊娠適齢期」は身体的には女性の問題ですが、結婚や妊娠、子どもを産み育てる環境整備は女性たち個人だけではできません。

最近、イギリス人の友人や、北欧の教育・福祉を研究している友人と話す機会がありました。「どんな家庭に生まれても本人の希望があれば、大学まで学ぶ権利は保障されている」という話を聞き、ため息が出ました。私たちはどんな社会を望んでいるのか、どの政治家ならその思いを代弁し行動してくれるのかをよく考えて「投票する」ことが第一歩なのではないかという結論に至りました。

ただ「妊娠適齢期」に子どもを産めばいい訳じゃない、産まれてきてくれた子ども達が幸せになれる社会であることこそ大切なのだと思います。

「セナードネット」始めました

看護師 早坂 恵



「セナードネット」～産科診療情報の多施設共有システム～

耳慣れない言葉... おそらく初めて耳にしたという方が殆どではないでしょうか。このシステムが開始されるという知らせがあった時、『ネット』という言葉が含まれているだけで、内容も知らないのに、不安な気持ちになったのを覚えています。

2012年6月、宮城県内の主要な産婦人科医が中心となって、特定非営利活動法人みやぎ産婦人科医療情報ネットワーク協議会が設立されました。主な目的は、産科セミオープンシステム（きよくりNEWS Vol.46 に掲載）における共通診療ノートを電子化することです。この『電子化』がポイントなのです。

2011年3月11日の東日本大震災では、いくつもの病院が津波に流され、膨大な量の医療情報までもが消失しました。紙のカルテはもちろんですが、CT や MRI による画像データも水没しました。診断結果や投薬履歴を失ったことで、震災後の診療にかなりの支障をきたしました。セナードネットシステムは、妊産婦の方々のプライバシー保護を厳重に図りながら、大災害時にも大切な検診情報を失わず、施設間で医療情報を共有し、効率的で安心な産科診療体制を目指しています。これまでは共通ノートを使用して、妊婦さん、検診施設、分娩施設間で情報を共有していましたが、コンピュータネットワークを使用することで、検診結果や検査結果を迅速に知ることが出来るようになります。バックアップされることで、災害や緊急時においても適切な診療を受けることが可能になります。また、システムが継続的に機能していくことで、将来にわたって蓄積されたデータが診療や統計解析に有効利用されることも期待されます。

「コンピュータ」がどちらかといえば苦手な我がクリニックの看護部門です。このシステムが導入されたことで、苦手な業務が少し増えたこととなります。「セナードネット」は日々の診療においてメリットを感じるというよりも、緊急時や将来的に活躍が期待出来るものです。すぐに成果を感じ取ることは出来ないけれど、コツコツと地道な作業がきっと大事な時に役に立つのだと信じて！ ... がんばります。

私のオフタイム ～ 俺の名は「クロ」～ 坂総合病院名誉院長 村口 至 先生

今宵は明星と三日月が会話できる距離だ。俺は最近、毎週日曜日暗くなるのを待ちわびている。隣のオヤジが4,000歩分付きあってくれるからだ。なぜなら、俺のオヤジが、昨年急死してから残された未亡人の膝が悪いために俺をもて余すようになったのだ。なぜこの寒さの中、夜なのか。隣のオヤジの言い分は、第1に、俺が醜いからだという。確かに俺は、隣のオヤジが言うように、顔はイノシシのように大きく、真っ黒の毛むくじゃらだ。そのうえ寸胴（ずんどう）で明るみ出るのが憚れるからだという。体重は20Kgは優にある。第2に幼児教育を受けていないために、ちっちゃな同族を見ても興奮し、大声でわめいてしまうのだ。そのたびに、隣のオヤジをつんのめさせるのだ。最近道中、隣のオヤジがつぶやくのだ。俺は3匹目にあたるそうだ。最初は小学3年生の時、中型犬で”ロン”と名付けた。北海道であつたし綱で縛られての散歩など習慣はなかった。自由に駆け回っていた。吹雪に巻き込まれたとき、ロンに救われたとか。仙台に来たのち亡くなったとか。2番目は、”ブッチー”だ。シェパードの血が入っている雑種の大型犬。旦那の遅い帰りを待って月夜の散歩だった。遠くを眺めている姿は、「哲学者」のようだと言われたものだ。3匹目が俺だという。我が家の未亡人は大変恐縮がっているが、隣のオヤジは、健康づくりで、毎日1万歩を目指しており、その一部であって何ら恐縮がることはないのだ。俺の評価？ まだない。ただ最近「全身を喜びで表現し抱きついてくるのはお前だけだ」が口癖だとか。俺も隣のオヤジも後期高齢者仲間入りだ。あと何年付き合ってやれるか夜道でふと思う。俺の名は「クロ」、隣のオヤジは、きよクリニック院長の旦那だ。



夜の散歩

休診

○ 現在、休診の予定はありません。

発行元：村口きよ女性クリニック

<http://www.muraguchikiyo-wclinic.or.jp>

e-mail: con@muraguchikiyo-wclinic.or.jp

